

07 一目均衡表①

一般的なチャート・テクニカル分析では、過去の値段やトレンドなどが重視され、時間の概念は二次的に扱われる傾向があります。

時間を主体とし、値段を二次的なものに過ぎないとの考え方に基づいて考案されたテクニカル分析の一つが「一目均衡表」です。

一目均衡表は株価チャート研究者の一目山人が考案、①転換線、②基準線、③先行スパン、④遅行スパン、⑤均衡表計算値などで構成されています。



07 一目均衡表②

② 基準線

過去26日間の高値と安値の平均線(高値と安値の合計値を2で割った値を結んだ線)です。

① 転換線

基準線の26日に対し、過去9日間の高値と安値の平均線になります。
転換線が基準線より上にあれば買い局面、下にあれば売り局面と見ます。しかし、これだけで売買のタイミングを決定することはできません。

④ 遅行スパン

その日の終値を26日遡った地点に書き込み、それを結んだ線になります。
遅行スパンが下から26日前のローソク足の足形(実体)を突破すれば上放れと見ます。しかし、その寸前まで行きながらも、当日の値動きが下げたため突破できなかった場合は、相場は下落基調を辿るとされています。
遅行スパンが26日前の足形の上方に位置し、遅行スパンが足形を下抜いた場合、売りのポイントになるとされています。下抜かなければ強気相場の継続とされます。

07 一目均衡表③

③ 先行スパン

現在の値動きが一定期間後にどのような影響を及ぼすかを2本の線で示したものです。

先行スパン1は、基準線と転換線の平均値を求め、26日先に記入し、それを結んだ線です。

先行スパン2は、過去52日の最高値と最安値の中間値を26日先の地点に記入し、その点を結んだ線になります。

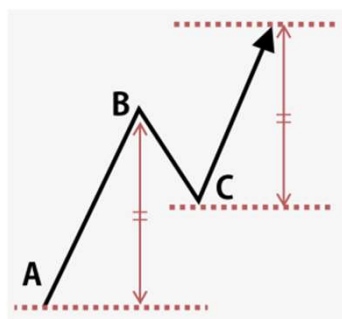
上記2本の先行スパンの間を塗りつぶすと「雲」と呼ばれる帯状のものができます。これを支持帯、もしくは抵抗帯と見ます。実体が支持帯を下向きに突破すると売り局面への転換となり、それまでの支持帯は抵抗帯に変わります。逆に、相場が抵抗帯を上方へ突破すると相場破壊局面に変わり、それまでの抵抗帯は支持帯に変化します。



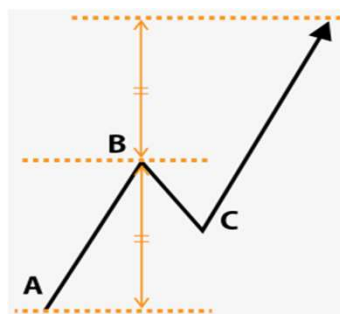
07 一目均衡表④

④ 均衡表計算値

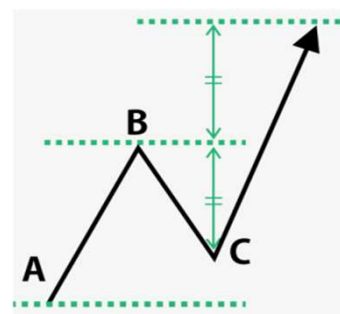
目標値の計算、つまり、上値や下値のめどを探る方法の一つです。
下の4つの例がその計算方法となります(目標値をXとします)。均衡表計算値はそれまでの波動を基準としており、エリオット波動理論での算出方法と相通じるところがあります。



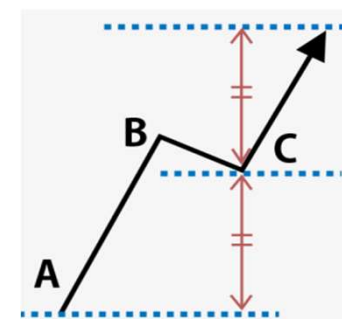
$$X=C+(B-A)$$



$$X=B+(B-A)$$



$$X=B+(B-C)$$



$$X=C+(C-A)$$

※エリオット波動理論・・・米国のチャート分析家ラルフ・N・エリオットが1938年に発表した波動理論。「体勢的な上昇相場は方向波動3つと訂正波動2つの計5波動から成り立ち、体勢的な下降相場は方向波動2つと訂正波動1つの計3波動から成り立つ」としている。

07 一目均衡表⑤



右は日経平均株価のチャートです。
一目均衡表には確率の高いサインがあります。下記の2つがそれになります。

【三役好転(買いサイン)】

- ① 転換線 > 基準線
- ② ローソク足(実体) > 雲
- ③ 遅行スパン > ローソク足(実体)

【三役逆転(売りサイン)】

- ① 転換線 < 基準線
- ② ローソク足(実体) < 雲
- ③ 遅行スパン < ローソク足(実体)

右の日経平均株価では  が三役好転、
 が三役逆転になります。